

「シンガポール派遣参加報告書」

京都大学文学部 3年 中村 魁

プログラム内容及び学習成果

今回のプログラムはシンガポール国際大学 (NUS)、及びそのイェール校 (Yale-NUS) において、計 6つのセミナーを受講し、授業内でのディスカッションや、課外時間でのレクリエーションを通して現地の先生や学生と交流を深めるものであった。セミナーは、アリストテレスやカントを取り扱う古典についてもものから、確率の意味を日常的な言語使用の観点から探る分析哲学的なもの、さらには自閉症者を範例として、言語的な思考とは異なった別なる思考を構想する応用哲学的なものまでラインナップが幅広く、受講者の興味・関心に応えるものであったと思う。授業内でのディスカッションでは、国の別を問わず活発な応答がなされた。しかし語学力は当然のこととして、即興的な議論の中で当意即妙にコメントをおこなう現地の学生の姿は、受けてきた教育のスタイルの違いを感じさせるのに十分なものであり、非常に刺激的であった。以後、インプット型ばかりでなく、アウトプット型の勉強も意識してゆかねばならないと思う。

海外経験として

シンガポールの印象を一言で言い表すなら「モザイク画」という言葉が最もしっくりくる。インド人街や中国人街、多国籍企業のビルがひしめく中心街、それぞれ雰囲気は全く異なる区画が徒歩で行ける範囲に共存している。それらをめぐらる中で感じたなんとも言い難い感情は、高層ビル、高級ホテルなどの都会的なイメージとは違う、薄暗く、雑然としたシンガポールの裏面に由来するものであったのだと思う。シンガポール国立博物館の展示に端的に示される単一の「歴史」への欲望はおそらく、決して共役されざる複数の民族がいることの裏返しとして理解されよう。

派遣者にとって、このプログラムが初の海外経験であったわけだが、典型的な多民族国家であるシンガポールを訪れることができたことは非常に実り豊かなものであったと思う。

進路への影響

現在派遣者は学部 3 回生であり、修士課程、博士課程への進学を希望している。そして海外留学をどこかの段階で行いたいと思っている。研究テーマとの関係で、留学先が非英語圏となる可能性が高いが、とにかく今回のプログラムを通して海外での学生生活に触れられたこと、非一母語である英語でコミュニケーションをとらざるをえない状況に置かれたことは貴重なものであった。来年度もこのようなプログラムが実施されるのかわからないが、もし機会があれば参加したい。